

# 哲学における種概念について

横路 佳幸 (YOSHIYUKI YOKORO)  
慶應義塾大学

本発表の目的は、Locke 以来様々な特徴づけが与えられてきた「種概念 (sortal concepts)」の理論的役割を考察し、その役割が有効に機能するためのある前提の妥当性を検討することによって、種概念の可能性と限界を明らかにすることである。

種概念とは、「山」や「人格」などの種名辞 (sortal terms) によって表現される概念または普遍者を指す<sup>1</sup>。これまで種概念は、言語哲学や形而上学、知覚の哲学、認知心理学などにまたがる多様な領域において特徴づけられてきたが、大別すればその諸特徴は次の6つに分類することができる<sup>2</sup>。

種概念  $f$  は…

- (1)  $f$  に属する対象を数え上げる (counting) 規準を与える (cf. Strawson (1959); Macnamara (1986))
- (2)  $f$  に属する対象について同一性 (identity) の規準を与える (cf. Locke (1690 [1975]); Geach (1962); Dummett (1981); Noonan (2009))
- (3)  $f$  に属する対象の持続条件 (persistence conditions) を与える、または  $f$  に属する対象の通時的同一性を追跡する (cf. Rips *et al.* (2006); Xu (2007))
- (4)  $f$  に属する対象について「それは何? (What is it?)」という問いに対する答えを与える、または  $f$  に属するものとして対象を取り出す (single out) ことを可能にする (cf. Wiggins (2001))
- (5)  $f$  に属する対象の本質 (essence) を特定する、または「 $f$  に属していなければ、その対象は存在しえなかったであろう」という反事実的条件文を構成する (cf. Brody (1980); Mackie (2006))
- (6)  $f$  に属し、知覚で捉えられるような対象についての単称思想 (singular thought) を可能にする能力にとっての必要条件を形成する (cf. Lowe (2013))

だが、近年種概念は多方面から批判に晒されている。たとえば、(4)の特徴づけに対し Campbell (2002)は、「なぜ種概念なしで対象への意識的な注意が不可能なのか」を説明していないと反論する。対象を取り出す、または個別化 (individuate) するのに、種概念を欠くような意識的注意だけでは不十分である根拠を、種概念を擁護する哲学者は提示していない。また、(1)や(2)の特徴づけに対し Burge (2010)は、種概念を用いて

<sup>1</sup> 種概念に提起される問題はいくつかあるが、本発表では取り扱わない。その中には、種概念とその他の「種」と呼ばれるもの (species や kind) とはどのような関係にあるのかという問題や、「対象 (object)」や「動物 (animal)」といった語は種名辞なのかどうかといった問題などが含まれる。

<sup>2</sup> これら6つの特徴は相互に関連し合っているが、それほど緊密な関係で結ばれているわけではない。たとえば、(2)、(3)、(4)、(5)を種概念の特徴として支持する Wiggins は、(1)を拒否している ((6)については何も語っていない)。

知覚的な対象を同定 (identify) または再同定 (reidentify) する必要はないと論じる。種概念によって与えられる同一性の規準や数え上げの規準を知覚主体が表象できないとしても、知覚や知覚的信念において彼女は、物理的属性を持ったものとして物体を指示できるのである。

以上二つの批判は、種概念に課せられた理論的役割が、少なくとも従来に比べて制限されねばならないという点において共通している。発表者は、この共通点をさらに一般化し、(1)から(6)すべてに当てはまる批判を展開することができると考えている。その際手がかりとなるのは、種概念が有効に機能するための言語使用および知覚にまつわるある前提の存在である。この前提が正当化されるとすれば、(1)から(6)の諸特徴はこれまで通り種概念に帰せられるべきだが、この前提が正当化されないとすれば、Campbell や Burge が指摘するように、種概念の理論的役割は著しく制限されねばならない。本発表が試みるのは、種概念に課せられてきたいくつかの役割に共通する特定的前提を明らかにし、その妥当性を哲学的・認知心理学的見地から検討しながら、種概念の持つ意義と問題点を浮き彫りにすることである。

## 参考文献

- Brody, B. A. (1980), *Identity and Essence*, Princeton (NJ): Princeton University Press.
- Burge, T. (2010), *Origins of Objectivity*, New York: Oxford University Press.
- Campbell, J. (2002), *Reference and Consciousness*, New York: Clarendon Press.
- Dummett, D. (1981), *Frege: Philosophy of Language*, 2<sup>nd</sup> edn., London: Duckworth.
- Locke, J. ([1690] 1975), *An Essay Concerning Human Understanding*, P. H. Nidditch (ed.), Oxford: Clarendon Press.
- Lowe, E. J. (2013), "Individuation, Reference, and Sortal Terms", in his *Forms of Thought: A Study in Philosophical Logic*, New York: Cambridge University Press.
- Mackie, P. (2006), *How Things Might Have Been: Individuals, Kinds, and Essential Properties*, Oxford: Clarendon Press.
- Macnamara, J. (1986), *A Border Dispute: The Place of Logic in Psychology*, Cambridge (MA): MIT Press.
- Noonan, H. (2009), "What Is a One-Level Criterion of Identity?", *Analysis* 69, 274-77.
- Rips, L. J., Blok, S., and Newman, G. (2006), "Tracing the Identity of Objects", *Psychological Review* 113, 1-30.
- Strawson, P. F. (1959), *Individuals: An Essay in Descriptive Metaphysics*, London: Methuen.
- Wiggins, D. (2001), *Sameness and Substance Renewed*, New York: Cambridge University Press.
- Xu, F. (2007), "Sortal Concepts, Object Individuation, and Language", *Trends in Cognitive Sciences* 11, 400-6.